



馬耳東風

現役時代に比べて時間に多少余裕を持てるようになった今、テレビを見る時間もやや長くなった。現在のハイビジョン液晶テレビ（H-TV）が我が家に来たのは10年前のこと。それまでのTVに比べて格段に綺麗で臨場感のある画面になり、色々な番組を生放送又は録画して大に楽しんでいる。見慣れたH-TVの画素数は207万、今、店頭に並べられている4K-TVは829万画素、8K-TVになると3,317万画素とデジタルカメラの上位機種並みの解像度になる。カラーTV本放送が始まった1960年から半世紀余、これだけ膨大な映像を送る側とそれを再生する側の技術・機器の進歩には驚かされる。

放送に関する画像処理技術・機器の進歩とは裏腹に、提供される放送番組の内容に関してはどうであろうか。小生がTVを視聴する番組は、主に夕方から夜にかけて放送されるものが多いので、限定的な見方になるかも知れないが、以前に比べて内容的に疑問を感じることも多くなった。科学、紀行、スポーツ、映画、美術番組などをよく見るが、美しく迫力のある映像は素晴らしく、感動的で、見た後に充足感が残り、気持ちよく眠りに就けるものも多くある。その一方で制作者の意図が判らない番組がある。特に最近では、同じような騒がしいバラエティー番組が目立つが、内容の信頼性に疑問を感じて見る気がしなくなった。今は昼夜を問わず非常に多くの番組が放送されているため、番組制作に十分な時間と経費をかけられず、安易な企画で粗製乱造されているのではないかと勘ぐってしまう。例えば、ヨーロッパ等の古都を訪ねる紀行番組では、長い歴史を通して蓄積されて

きた建造物等を臨場感あふれる映像で見たいと期待するのだが、そこに出てくる「お笑いタレント」のふざけた話は雰囲気壊すものであり、また食事場面の多さにも幻滅することがある。科学番組でも、最先端技術の素晴らしい映像に驚きを持って見入っていると「お笑いタレント」が専門家に対して的外れの冷やかしを入れたり、笑いを誘導するような失礼な質問をぶつけて得意になっている場面などは全く場違いな感じがする。教養番組の中に、娯楽番組・バラエティー番組と同じように「お笑いタレント」が出てきても番組の質を損なうのみで無意味と思うのだが、これは個人的な好みの問題であろうか。娯楽番組であれば笑いそのものは場を和ませることができるし何ら問題はないが、それでも笑いを誘うために司会者自身が大声で笑うのは「馬鹿笑い」で、場が白けてしまう。TVでもラジオ番組でもそれなりの品位が必要と思うのは昭和世代の偏見か、老いの一徹のためだろうか。

民放では番組の制作に当たりある程度スポンサーの意向に従わざるを得ない制約はあるだろうが、視聴料を取っているNHKにあってはより一層厳しい姿勢で番組の企画・制作をしてほしいものである。2年ほど前、小林 旭が記者のインタビューに答えて「バラエティー番組には色々な個性がある人が集まってこそ意味があるのに、同じようなバカみたいのを集めて同じことをやる番組に出ることは良しとしない」と言っていた（朝日）が理解できる。氾濫する「馬鹿笑い」だけは何とかならないものか。大宅壮一が「一億総白痴化」を唱えて約半世紀が経った今、この現状を見たらどう思うだろうか。

（青）